

島原の乱（1637-1638）は、徳川幕府（1603-1867）の軍勢に対して、約 3 万 7 千人の農民と主君のいない武士が起こした反乱である。反乱軍には、高い税金や宗教的迫害に怒る者、島原の先代領主がカトリック信者だったため、島原藩の下で改宗したキリシタンが多く含まれていた。反乱軍は小競り合いの後、城に避難し、数カ月にもわたる包囲戦に突入した。

両者とも銃器は十分に備えていた。徳川軍はオランダの商船隊から砲艦と大砲を提供され、籠城戦を展開した。一方、反乱軍は、オランダ商人のライバルであるポルトガル人から入手したマスケット銃で武装していた。

幕府軍が城を攻め落としたのは、反乱軍が食糧と火薬を使い果たした後だった。数万人の反乱軍は戦死するか、処刑された。

反乱の後、幕府は鎖国政策を強化し、キリスト教禁止令を強化し、銃器の製造と所持に新たな制限を課した。その数年後、幕府は欧米人の入国を完全に禁止することを決定する。